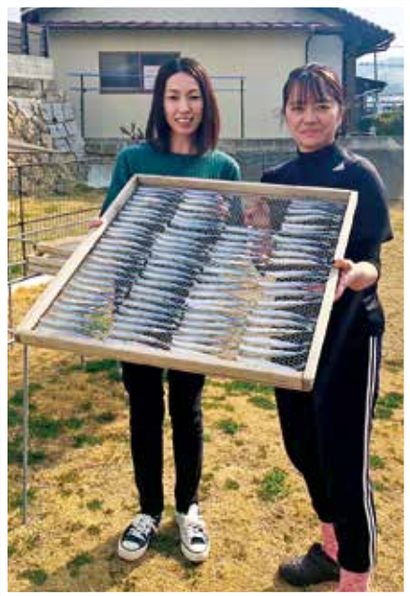
4月9日(日)

江田島の サヨリ干し



1パック **980円**(税込)

～サヨリ干しとの出会い～

インスタグラムで日々投稿されているサヨリ干し、めちゃくちゃ気になる。昔では考えられない…再会方法。江田島の先輩。買います！と、メールを送り。到着後、炙って食べる。噛むなり、味がギュッ、旨みがギュッ！めちゃくちゃうまい！おかずと言うよりかは、酒のお供に。干物なんで、正直硬さはあります。「先輩、江田島いきます!!」「なんで？笑」そーなりますよね。「サヨリ干し美味しかったんで、見に行ってもいいですか??」「うち1人でしょーるけー見にきても、捌いて干すだけよ！」「それでもいいです。」現地に行ったら必ず何かあるはず！美味さへの道が!!と思い…半無理矢理アポをとり、江田島へ!!

久々のフェリーに乗り海を眺めていたが、気持ちよく爆睡、笑。20年ぶりの再会でしたが、そんな感じもせず、めちゃくちゃ面白い。当時を思い出しました。笑える笑える！

捌い干すだけ!!と言われてましたが…めちゃくちゃ、こだわりありました。サヨリも、最初は小・中・大とされて見たらしく、この小サイズが番美味しかったみたいです、骨まで食べれる。捌いて洗う。サヨリのお腹って黒いんですよ。ここを綺麗にするのが結構鮮魚でも苦戦していて、手袋してされてたんですが、この手袋で指3本！1本、2本ではダメらしーです。3本に意味がある。と！手袋もこれがいいと教えてもらい……海風に当たり干される…。

当初は、300袋発注してたのですが、1人作業、魚は天候に左右されます。無理言って150袋ご用意してもらいました。しかも、庄原まで自ら納品に来てもらうとゆー、優しい先輩ありがとうございます！ぜひ、手作りのサヨリ干し食べて見てください。

西田鮮魚店 副店長　越道 裕子

ジョイフル

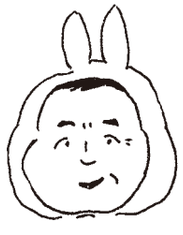
西田鮮魚店 ☎72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489（旧庄原市内はご自宅に配達）

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

『中学の同窓会で保育所のときの自分に会えた』

鮮コーポレーション㈱　代表取締役会長　西田　昌史



65年前、私は女の子の心をいたく傷つけたらしい。

彼女の名前は真弓美ちゃん。あの日のことを今でも忘れられないのだと話した。

あのことがあってから、彼女は私を大嫌いになり、遠くに私を見るだけで逃げるようになったのだとか。

私の記憶の中には、いっさいない。

二次会は庄原グランドホテルの地下にあるチャーリーブラウン。

ワイワイガヤガヤと騒々しいラウンジ。ひとつだけ空いていた席に座った。周りは、55年も前の中学時代の話に花が咲いているというのに、隣にすわる彼女は、さらに保育所にまでさかのぼって話し始めた。

あのころの保育所は花組・星1組・星2組・月1組・月2組・月3組に分かれていた。月1組は3年保育の子、月2組は2年保育、月3組は1年。月1組は花組、星1組を経てきているから、古株のプライドのようなものをもっている。「ここはワシのシマじゃ」的な。

私は月1組。5月生れで体も大きかった。この時期の1ヶ月、2ヶ月の差は大きい。ましてや、一年も違うと…。自然、私は保育所のボスとして君臨するようになった。これは、私の思い違いではない。何人か、そう証言する人もいる。自分史上、最強の時代にちがいない。ことわっておくが5才である。

彼女もその一人だった。ガキ大将の西田君と呼び、話し始めた。

お昼の給食のとき、先生が配膳されたのか、自分たちも少しは手伝ったのか覚えていないが、とにかく、配膳された。「いただきます」をみんなで言ってから食べるという約束は、今も変わっていないだろう。もちろんあの頃も。

もう一度ことわっておくが5才のとき。

配膳の途中で、私が突然、大きな声を出したらしい。

「真弓美ちゃんが、先に食べた！」。

名前を出したかはわからない。なにしろ、私は、そんなこと、まったく覚えていないのだから。

それを聞いた真弓美ちゃんは、びっくりして泣きだしたのだとか。あのころの食器はカネだった。彼女は、カネの器に入ったお汁は熱いから、ふ～ふ～と息をかけて、冷まそうとしていたのだと、強い調子で、あの時の真相を話した。

覚えてはいないが、私ならやりそうだ。ひと言、言いわけをさせてもらえば、けっして、いじめようと思ったのではないだろう。これでも、けっこう正義感は強い。たぶん、ほんとに先に食べたと思い、それを咎めようとしたのに違いない。こどもによくあることだとは思うが、真弓美ちゃんが傷ついたことは間違いない。若気のいたり?とはいえ、申しわけなかった。私は、すなおに「ごめん」とあやまった。今は、看護師として呉に住むという彼女は気持ちよく許してくれた。それも、「こんなに、やさしくてダンディなおじさんになってるのだから」というひと言を添えて。ありがとう、真弓美ちゃん。

この同窓会で、いちばんの思い出になった。

保育所のときの自分に会えたような気がした。

桜満開の4月1日。『古希記念　最後の晩餐同窓会』を庄原グランドホテルで行なった。参加者50名。4人ほど「誰？」と名前を聞いた。

司会を仰せつかった。真里ちゃんとふたり。私は、賑やかな宴会状態の司会は、なかなかのものがあると自負しているのだが、きちっとした進行は苦手だ。その点、高校時代、放送部にいた彼女は、みごとなほどに、気品高く会を進める。従って、会の大筋の進行は、彼女が勤め、私はアトラクションに移ってからの担当を願い出た。が、俊五があらかじめ決めていた進行を無視する私に、真里ちゃんがやきもきし、何度、ヘルプに入ってくれたか。ありがとう真里ちゃん。

詩吟の師範（だったと思う）の木曽っぺがこの同窓会のために作詞作曲してくれた詩吟を朗々と歌い上げて会は始まった。

鬼籍に入った10名の同級生に黙とうしたあと、当時の生徒会長の一休の挨拶。仕事の一線を引いて、こうして人前で話すことは苦手になりましたと、淀みなく話す。さすが、我らの生徒会長だ。ちなみに、私は副会長だったが、誰もそれを覚えていない。生徒会長と副会長の差は、実に大きい。一休は、その心配りと言い、我らの誇る生徒会長だ。

続いて、恩師の森信先生に壇上に立っていただく。一休もその挨拶で言っていたが、恩師の先生がいてくださってこそ同窓会は芯のあるものになる。ことに森信先生は、結婚して広島から移ってこられて初めて出会ったのが私たちということで、大人になってからも、近くでずっと見守ってくださっている。

次に、学年でダントツで一番の成績だったマコッちゃんが乾杯の音頭。彼は中学3年生になって急激に成績が伸びた。すごかった。彼は内海塾に入ったのがきっかけだと言う。一休も同じことを言っていた。実は、私もそうだった。内海の先生には、中学卒業以来、お会いしていない。学校ではないが、内海塾なくして中学時代を語れない人は多いはずだ。

そのあと、琴の演奏。これも同級生にお琴の先生がいる。夕起子ちゃん。さすがは琴の先生、立ち居振る舞いに楚々とした品がある。ちゃん付けは、ちょっと気が引けるが、まぁ同級生のよしみだ。『春の海』を演奏してくれた。格調高い同窓会はここまで。

酒も入り、さぁ私の出番。こんなことを言えば、みんなに叱られるが、サーカスの猛獣つかいに似た感覚が求められる。なにしろ、全員70才だ。恐いものはない。自由闊達。自由気まま。

人の言うことは聞いちゃぁいない。聞いても忘れる。私がそうだから間違いない。

中でも手ごわいのがひとりふたり。これは、放っとくしか手はない。マコちゃん（マコッちゃんとは別）は、女性を全員舞台に上げてウクレレと合唱。カメちゃんのサックス、辰ちゃんのピアノ。清水劇場で鍛えた友さんの踊り（森進一の『それは恋』）。おひねりが飛んだ。トリは東京からギターをかついできたミツが2曲、大トリは、そのミツのギターをバックに長ブウの『星に祈りを』。いつもながら心をうつ。声がしみる。

その間にカラオケ自慢が何人か手を挙げて歌う。うまい。若かりしころの生活が垣間見える。

フィナーレに入る。辰ちゃんのピアノで庄原中学校の校歌。2番を歌っているとき、こみ上げるものが…。自分でびっくりした。

締めの挨拶は、みちえちゃん。実に堂々と。内気な子だったはずなのだが…。

最後に、5年後『最後の晩餐同窓会　その2』をやるかと皆に聞いた。拍手が沸き起こった。その時の司会は誰が？やっぱり真里ちゃんと西田じゃろ。今回も点数を付けるなら90点。自画自賛。次回も…。

どんな同窓会も、時を超え、あのころの自分に会わせてくれる。不思議じゃね。

２０２３年４月９日